

令和元年9月2日現在

機関番号：37302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13283

研究課題名(和文)ユネスコ「長崎教会群遺産登録」に向けての史料編纂

研究課題名(英文)Compilation of Unpublished Documents of the Church of Nagasaki for inclusion in the World Heritage List

研究代表者

滝澤 修身(Takizawa, Sadi)

長崎純心大学・人文学部・教授

研究者番号：60640464

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文):私の研究目的は、「長崎・天草の潜伏キリシタン関連遺産」をユネスコの世界遺産に登録するために、16・17世紀の長崎のキリシタン時代に関連する、未開の史料、つまり、手稿の『日本年報』を収集し、史料編纂することであった。実際にイタリアのローマ・イエズス会文書館、スペインのトレド・イエズス会古文書館、国立図書館、王立歴史学学士院、国立文書館、王宮図書館に所蔵される手稿の『日本年報』を収集することができた。全史料の95パーセントは収集し終わった。さらにそれらの史料の写真をUSBに取り込み、史料編纂することができた。今、収集した史料群を現代のアルファベットにし、将来の翻訳作業に備えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

収集した史料をもとに『サムライの国・日本におけるイエズス会士』(2018年、Degital Reason社)を書き上げた。近日中に『長崎の教会史と信徒の日常生活(16・17世紀)』がスペインのRunica出版社から、『日本イエズス会布教史概説(16・17世紀)』が日本の聖母の騎士社から出版されることに決定している。これらの著述では、日本のイエズス会の布教方法が詳細に書かれており、ヨーロッパ及び日本のキリシタン研究に確実に寄与できる内容である。さらにスペインにおいて、2回、日本史に関する国際研究会を主催し、長崎史談会でも研究成果を報告し、専門家や一般市民に研究成果を還元した。

研究成果の概要(英文):My research focused on collecting unpublished documents, specifically the manuscripts of "Annual Relation" that contain historical information on Nagasaki in the 16th and 17th centuries with the aim of recommending the Church of Nagasaki (referring to Christians living in Nagasaki and Amakusa) to the UNESCO World Heritage. In this regards, I have a number of documents from the Archive of the Jesuits in Rome in Italy, the Archive of the Jesuits in Toledo, the National Library, the Library of the Royal Academy of History and the Historical Archive in Spain, totalling approximately 95 documents. These have been archived digitally and I am in the process of updating these documents into the modern vernacular.

研究分野：キリシタン史

キーワード：長崎 『日本年報』 潜伏キリシタン ユネスコ(UNESCO) 世界遺産登録

## 1. 研究開始当初の背景

私は、2012年長崎県遺産登録推進室より「長崎教会群関連遺産」をユネスコの世界遺産登録するために「16・17世紀の宣教師記録」の編纂委員を委託された。この時点では、16・17世紀の活動した宣教師が記録した長崎の記述を、刊本の松田毅一編『16・17世紀日本イエズス会報告集』(15巻)から抽出し、その原文をエヴォラ版『日本報告集』から拾い上げる作業を行った。松田編『16・17世紀日本イエズス会報告集』の85パーセントの史料は、16世紀の刊本であるエヴォラ版『日本報告集』*Iesvs : cartas qve os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549. até o de 1580...*; 1. tomo., 2. tomo.から日本語訳されたものであったからである。

しかし、東大史料編纂所の五野井隆史教授から、刊本以外の史料を収集する必要性を説かれた。そこで、私は、16・17世紀の長崎を記録する手稿版『日本年報』をヨーロッパ各地の古文書館・図書館から収集しようと試み、平成28年度の科研費を申請した。

## 2. 研究の目的

私の研究目的は、「長崎教会群(2017年に改称「長崎・天草の潜伏キリシタン関連遺産」)をユネスコの世界遺産に登録するために、16・17世紀の長崎のキリシタンの未開の史料、つまり、手稿の『日本年報』を収集し、史料編纂することであった。

## 3. 研究の方法

16・17世紀の長崎を記録する手稿版『日本年報』は、イギリス、スペイン、イタリア、ポルトガル、ベルギー、メキシコの諸古文書館・図書館に87点が保管されていることが判明した。そのほとんどは、イタリアのローマ・イエズス会文書館、スペインのマドリードにある国立図書館、王立歴史学学士院、国立図書館、王宮図書館、スペインのトレドにあるイエズス会古文書館に保存されていることが判明した。イタリアとスペインの史料が、全体数の95パーセントを占めていた。

そこで、イタリアのローマ・イエズス会文書館とスペインの諸古文書館・図書館から集中的に手稿版『日本年報』を収集した。ローマ・イエズス会文書館からは、インターネットを使用し必要な史料をすべて収集することができた。スペインの上記の古文書館・図書館は、直接、訪問し、必要な手稿史料をデジタル化してもらい、日本にインターネットを使用し送付してもらった。スペインには夏季休暇を利用し、3回、渡西した。

## 4. 研究成果

収集した手稿版『日本年報』は、すべてUSBに整理し、保存した。当初の計画では、一冊の史料集を作成する予定であったが、史料があまりにも膨大であることからUSBを使用し、整理することが最良であると判断した。現在は、Wordを使用し、スペインの原典からアルファベットに転写している最中である。この作業は、一朝一夕には進まないで、以後、数年かかると考える。資金不足から、作業が中断せざるを得ない状態にあることから、今年度の科研費の申請もしている。今後は、転写した史料を日本語に翻訳していく予定である。

収集した史料をもとに、使用可能な史料を用いて、3冊の著作を書き上げた。

(1)『サムライの国・日本におけるイエズス会士(16・17世紀)』(全423ページ)(*Los Jesuitas en el Japón de los Samurais (Siglos XVI-XVII)*, (Digital Reason, 2018)を2018年にマドリードで出版した。本書は、Amazonを通じて世界中の人々が購入可能である。また、これらの本は、国際研究会(2018年、マドリード)を開催した際に、販売された。本書は、第二部構成である。第一部では、16・17世紀のイエズス会の日本布教の様相を、収集した史料を駆使し、描き出した。第二部では、日本、特に長崎におけるイエズス会の布教方法を概観した。現在まで、イエズス会の日本布教は総合的観点から纏められることはなかったため、本書を出版した意味合いは高いと考える。

(2)『長崎教会と信徒の日常生活(16・17世紀)』(全164ページ)(*La Historia de la Iglesia de Nagasaki y la Vida Cotidiana de los Cristianos Japoneses*, (Rúnica, 2019)がマドリードで近日中出版されることになっている。同書は第二部構成である。第一部では、長崎のキリシタン史を概観し、その中で長崎の教会の担ってきた役割を分析した。第二部では、日本、特に長崎のキリシタン達の日常生活史を取り扱い、実際に教会を中心にキリシタンたちがどのよう

な生活を送っていたのかを描き出した。

(3)『日本イエズス会布教史概説(16・17世紀)』(聖母の騎士社、2020年2月出版予定)本書では、科研費で特にスペインにおいて収集した史料の一部を取り込んで、日本におけるイエズス会士の布教史を分析してみた。ザビエルの日本での布教開始から始まり、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の中央政権との関係においてイエズス会がどのように日本でキリスト教布教を行ったのかを描き出した。

これら3書の他にも、科研費をいただいていた3年間に、キリシタンに関連する論文を4本、共著を5本執筆した。またマドリードにおいて、2017年、2018年に「日本の歴史」をテーマに2回国際研究会を組織し、私の「長崎の教会群」、「長崎・天草の潜伏キリシタン」に関する研究成果を報告した。日本においては、国際日本文化研究センター(日文研)、長崎史談会などで研究成果を発表した。特に、長崎史談会では、2017年、2018年の2年に渡り、私の研究成果を4回、長崎市民に還元した。2018年6月30日に「長崎・天草の潜伏キリシタン関連遺産」は、無事にユネスコの世界遺産に登録された。今回、科研費をいただいた私の研究も本登録に部分的にはあるが、寄与できたことに喜びを感じる。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

Osami Takizawa (滝澤修身), "Los Cristianos en Japón, Pasado, y Presente. Expansión, Decadencia y Resurrección de los Cristianos Japoneses", *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CCXIII, 2016, pp. 151-187.

滝澤修身、「ドミニコ会士が見た日本の迫害と殉教」、『純心大学紀要』、2016年、41-62ページ。

滝澤修身、「日本ドミニコ会士の宣教理念と布教方法」、『純心大学紀要』、2017年、1-18ページ。

滝澤修身、「16・17世紀におけるドミニコ会日本布教をめぐる諸相」、『純心大学紀要』、2018年、89-124ページ。

### 〔学会発表〕(計14件)

滝澤修身、「スペイン系修道会の日本布教」、長崎純心大学「長崎学講座」、2016年、江角記念館

滝澤修身、「天正少年使節団をめぐる諸相」、長崎歴史文化博物館招待講演、2016年、長崎歴史文化博物館

滝澤修身、「スペイン系修道会と長崎」、長崎純心大学長崎学一般講座、2016年、出島交流会館。

滝澤修身、「天正少年使節団と長崎」、長崎県立美術館「スペイン文化講座」、2016年、長崎県立美術館。

滝澤修身、「天正使節団と長崎」、長崎史談会、2017年、長崎勤労福祉会館。

滝澤修身、「旅の話(1)」、長崎純心大学「長崎学講座」、2017年、江角会館。

滝澤修身、「旅の話(2)」、長崎純心大学「長崎学講座」、2017年、江角会館。

滝澤修身、「長崎・天草の潜伏キリシタン世界遺産登録をめぐって(1)」、長崎史談会、2017年。

滝澤修身、「長崎・天草の潜伏キリシタン世界遺産登録をめぐって(2)」、長崎史談会、2017年。

滝澤修身、「スペイン系修道会の日本布教」、長崎史談会、2016年12月15日、出島交流会館

滝澤修身、「長崎・天草の潜伏キリシタン世界遺産登録をめぐる(1)」、長崎史談会、2018年

滝澤修身、「長崎・天草の潜伏キリシタン世界遺産登録をめぐる(2)」、長崎史談会、2018年

滝澤修身、「「あいだ」 - キリシタン時代を中心に -」、国際日本文化研究センター共同研究会、2018年

滝澤修身主催、「日本の文学、文化、映画をめぐる」、アルカラ大学、2018年。

〔図書〕(計8件)

共著。滝澤修身、「16世紀宣教師記録に見る海賊」、『海賊史観からみた世界史の再構築』(稲賀繁美監修)、2016年、416-430ページ。

共著。滝澤修身、「ジョルジュ結城弥平次」、『キリシタン大名 布教・政策・信仰の実相』(五野井隆監修)、2017年、371-386ページ。

単著。Osami Takizawa (滝澤修身), *Los Jesuitas en el Japón de los Samurais (Siglos XVI y XVII)*, Digital Reason, 2018. (総ページ数 423 ページ)

共著。Osami Takizawa (滝澤修身), Antonio Miguez Santa Cruz, *Caballeros, Jesuitas y Samurais, Rúnica*, 2018, (総ページ数 265 ページ)

共著。滝澤修身、「イエズス会宣教師の見た日本の茶道」、『日本の舞台芸術における身体 死と生、人形と人工体』(ボナヴェンツィーラ・ルペルティ監修)、晃洋書房、2019年、115-132ページ。

共著。滝澤修身。「旅の話」、『浦上四番崩れから 150 年を迎えて』、長崎純心大学博物館、2017年、117-136ページ。

単著、Osami Takizawa (滝澤修身), *La Historia de la Iglesia de Nagasaki y la Vida Cotidiana de los Cristianos Japoneses (Siglos XVI-XVIII)*, 近日中出版予定、(総ページ数 164 ページ)

単著、『日本イエズス会布教史(16・17世紀)』、聖母の騎士社、2020年2月出版予定。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。